

離島における母親たちの育児環境とネットワーク(2)

—東京都小笠原村・父島に在住する母親へのインタビューから—

○亀井美弥子¹ 岡本依子¹ 菅野 幸恵²

(東京都立大学¹ 白百合女子大学²)

問題

小笠原諸島は、日本の太平洋上に散在する大小30余の島々の総称で、主島は父島で東京の南約1000kmに位置している。東京-父島間の交通は定期船が6日に一便就航しているだけであり、所要時間は片道25時間30分である。このような離島は、様々な資源が求められる子育てにとって、一見不便であるかのように見える。しかし、父島の子ども数は決して少なくない(表1)。いったい父島の母親たちはどのように子育てをやりくりしているのだろうか。今回はその人的つながりに焦点を当ててエピソードを紹介する。

表1 父島の年少人口(離島統計年報, 1998)

	人口 総数	0-4 歳	5-9 歳	10-14 歳	年少 人口
男	1124	67	56	50	173
女	789	54	67	52	173
総数	1913	121	123	102	346

方法とデータの整理

現在子育て中の母親1名(H;34歳)に会うことができた。Hに対し、子育てと自然環境を主なテーマとして、半構造化面接を行った。場所は被面接者の自宅で、面接の所要時間は約2時間であった。面接は、被面接者の承諾を得た上ですべて録音テープおよびビデオテープに記録した。テープに録音された記録は、語り口が残る程度に概要をまとめた。

インフォーマントのプロフィール

Hは小学校2年生の長女、7歳の次女、1歳7ヶ月の長男の3児の母で、現在専業主婦である。12年前に東京での仕事を退職した折りはじめて来島し、結局アルバイトなどをしながら2ヶ月近く滞在することになった。その後も再び来島し、民宿などのアルバイトをするうち、資格を持って

いた歯科衛生士の職がたまたま空いていたことが長期在住のきっかけとなった。8年前に小笠原村役場職員の夫と結婚し、現在に至る。

父島の保育組織

父島には公的な保育施設として、父島保育所が2歳児から就学前までの保育を行っている。また、母親の自主的な育児サークルとして発足した「ちびっこクラブ」が現在社会福祉協議会に委託され、3・4歳児を対象に週数日運営されている。

結果と考察

以下に父島に特徴的に見られたエピソードを紹介する。なお、エピソード中の()はインタビューの問いかけである。

【島にいる同年齢の子はだいたい知ってる】

父島では、子どもが同年齢の親子はだいたい顔見知りだという。その理由として、居住範囲や子どもを遊ばせる場所が限定されていることと、母親どうしのつながりを作ることにに対して積極的な姿勢を持つ有志の働きによるものであると思われる。

エピソード:(大体同じ年齢の子は知ってる?)うん、多すぎて名前覚えきれないけど、知ってる。大体把握してる。…0歳児だと、外に出る時間がそんなに多くないじゃないですか?そのくらいの時は誰か代表になってつながりを持つとしないと、知らない子も出て来ちゃうかもしれないけど、1歳以上になると、海とかに出て来ちゃうから、それで大体わかるものなの。次女の時は、年代バラバラだったけど、何となくお母さんどうし仲の良い人と、グループみたいになつたりとかして、で、長男のときは、看護婦さんが音頭をとってくれて、お母さん達で集まろうって、名簿とかそういうのも作ってくれたんですよ。だから0歳児の時から知ってた。名前とか。ちびっ子(クラブ)に入ると大体そこで把握できて、ちびっ子と保育園で合わせて何人っていうふう。

【1歳から2歳までが大変】

父島では保育園の受け入れが2歳からであるので、仕事を持っている母親は産休後、子どもが2歳になるまでの1年間でどうするかが問題となっ

てくる。しかし、その対処方略は母親たちの中で、ある程度定式化されているようであった。それらは、育児サービス資源の乏しさからの必要に迫られた方略であるが、父島のオープンな人間関係のありかたによって、支えられている部分がありそう。

エピソード：人を捜して、お願いして、他に預け先がないので。だから、フルに仕事してる方はそれを1歳の誕生日になるまでに探さなきゃいけない。(それはいつもやってくれる人が決まったりするんですか?)自分の知り合い関係の中。やっぱり自分がお子さんを育て上げちゃった人か、ま、なんか、資格を持ってるとか、働いてないとか。そういう感じで探していくしかないんですよ。現在子育てをしてる人にはやっぱり頼めないですよ。その子が病気の時とか小さい子を預かったりできないですよ。普通考えて。(年輩の方が多いですか?)それか、一人にメインで頼むけれども、サブを用意しておいて、例えばその家が具合が悪くなったり、内地に行ったりとかするときには、そのサブの人にその期間だけちょっとか。母子家庭とかも多いから、小さい子がいて仕事しなくちゃならないって言うのも多いから、そういうことはこの島は丸見えだから。どうしても小さい子がいたら助けが必要ですよね。この島は公的な機関がないので、どうしてもお母さん同士で助け合うしかないから。

【転勤者の受け入れサイクル】

父島の就業者数の多くを占めているのが、通信やエネルギー、公務員などのサービス産業であり、毎年のように転勤者がやってくる。その中にはもちろん小さな子どもをもつ家族も多い。はじめての土地で彼らはどのように子育てでコミュニティに参加するのであろうか。ここでは、独自の転勤族の母親コミュニティの再生産が行われていた。

エピソード：(転勤でいらっしゃる方もここにいる間はもともと島にいた方と同じような感じなのですか?)何となく、仕事の奥さん達のつながりって言うか、今度引継で今度来る人は、何才と何才だから、誰々さんと誰々さんと同じくらいのところだから、よろしくね。とかそういう引継事項って言う訳じゃないけどあたりとかして。それで、だから毎年そういうことが繰り返されてるから、全然何も問題なし。そのお母さんが、自分だけでその時期は育てたいって言う人はいるわけ、そういう人はそれでも良いし、みんなと仲良くなっているんな輪を広げたいと言うことであれば、そういう受け入れ態勢が毎年繰り返されてることで違和感がないから。最初はその職場の人たちで仲良くなったところから、広がっていく。

【遊び場】

1歳児の遊び場としては、メインストリートの目の前にある海岸「前浜」がよく利用されていた。前浜での水遊びがこの年齢の子どもを持つ母親にとって人的つながりを作る上で重要な役割を果たしている。

エピソード：(前浜とか宮の浜とかは遊びに行ったら誰かいるっていう感じなんですか?)

うーん、宮の浜はそうでもないけど、前浜は必ずいる。(それは常に同じメンバー?)うーん、だからだいたい似たような年齢層になっちゃいますよね。だから、ちびっ子にも保育園にも行ってないちっちゃい世代。大体同じくらい。だから、そこで自然に集まって話をするから知り合いになる場合もあれば、最初から仲がいいから今日は何時くらいに行く、じゃ、行く行って言って、連絡を取ってから行く人もいるし、それはさまざまだけど。

【前浜デビュー】

「公園デビュー」という言葉が世間を賑わせて久しいが、父島においても「前浜デビュー」という言葉を耳にした。しかし、「前浜デビュー」はいわゆる「公園デビュー」という言葉がイメージするような“覚悟を持ってしきたりの厳しい集団にとけ込む”というような意味合いはなく、単に“初泳ぎ”という程度の意味であった。これは、父島ではいわば「あたりまえに」子育ての輪が存在することを意味しているのではないか。

エピソード：(公園デビューと違っていいじゃないですか、そういうので前浜デビューって聞いたことありますか?)

ああ、なんかいったいって笑。また内地[本土]みたいなこといっちゃって笑。前浜デビューね。(それってどうしたらデビューなんですか?)初めて泳いだのが前浜デビュー。前浜で初めて泳いだのがそれが前浜デビューで、小湊で泳いだら小湊デビューで、ただそれだけ(笑)。そんななんか、洋服はとか、そんな気にするんじゃなくて、ある程度大きくなないと海にもでられないから、大きくなって、やっと海に入れるようになりました!みたいな。そんなたいそうなモノじゃ。ただ初めて泳ぎましたっていうだけのことだと思いますけど。「デビューデビュー今日デビュー?」とか、みんなよってきて。

まとめ

父島における子育てコミュニティは子育てに十分でない資源を補うために、自らいくつかの方略を生み出していた。また、それは父島の限定された子育て環境とともに、オープンな人間関係に支えられているところが大きいと考えられる。